

団地を舞台に、50代女性二人の日常を描いた小説『団地のふたり』。昨年はドラマ化され、平凡な日常にある小さな幸せや、良い距離感の友情が多くの人々の心をとらえました。続編『また団地のふたり』も好評な、著者の藤野千夜さんに話を聞きました。

『団地のふたり』  
作家 藤野千夜さん

# 新春インタビュー 何気ない日々のちいさな幸せ



ふじのちや 1962年福岡県生まれ。出版社でマンガ雑誌の編集に携わったのち、作家デビュー。著書に『君のいた日々』『願い』など多数。『じい散歩』シリーズは20万部、『団地のふたり』シリーズは17万部を越すヒットとなっている。(写真は奈津子のモデルになった友だちと釣りに行った公園にて撮影)

## ふたりは幼なじみ

イラストレーターながら今はネットで不用品を売って生計を立てる奈津子(なつちゃん)と大学の非常勤講師をしている野枝(ノエチ)は幼なじみ。同じ団地に住み、奈津子の家で夕ご飯をほぼ毎日いっしょに食べます。ふたりとも50代で独身。彼女たちがいたらと見るテレビ番組やネットオークションで売れた昭和なものについてなど、なんでもない会話が続きます。

「奈津子とノエチは、仕事も恋もそれなりに、まあまあ生きています。」

## 何も起こらない

団地に住む人との近所づきあいも日々の出来事も、すべてがゆるい空気感でつづられます。同じ棟に住んでいるピンクのモヘアの帽子をかぶっている佐久間のおばちゃん、カラオケ大会で『天城越え』を熱唱する福田さん…。佐久間のおばちゃんに頼まれて網戸を直したら勝手に口コミでひら

らがり、二人であちこちの部屋に網戸の修理に行くことになりました。「『ええ、またやるの?』って言いながら。その代わりにピザをこちそうになったり、得意の煮物を分けてもらったりね。弱っている人がいれば、それを全部背負うことはできないけど、ちょっと助け合えればいい」

ドラマは、小泉今日子さんと小林聡美さん主演で話題をよびました。「当初、制作現場では『こんなに山場のない、何も起こらないドラマが受け入れられるのか?』って疑問もあったそうなんです。でも、回が進むにつれて視聴者から『こういう何も起こらないのいいな』って声が多く届い

## 過ぎた日々や人々

て。うれしかったです。演じた二人の掛け合いも絶妙で、出演者のみなさんがすばらしくて。いち視聴者として繰り返し見たいです」

1995年に『午後の時間割』で海潮新人文学賞を受賞してデビューした藤野千夜さん。37歳のとき『夏の約束』(2000年)で芥川賞を受賞。過ぎた日々や人々の日常をこまやかな筆致で書いてきました。シニア世代の親と中年の息子たちを描いた『じい散歩』や、今作『団地のふたり』が反響をよび、マンガ編集者だった頃の自伝的な作品『編集ども集まれ!』は4年前に刊行の文庫化でありながら重版がかかるなど、注目されています。

お互いのいいところも悪いところも知り尽くしている奈津子とノエチは、自身と長年の友だちがモデルだと言います。奈津子は車に弱くてよくドタキャンをするけれど、ノエチが車を運転して励ましながら外へ連れ出す。相手がダメな時は助ける、そんなルールが現実のままです。『ノエチはその代わり、奈津子の部屋にいるときはだらんと何にもしないで、奈津子がつくるご飯を食べる。奈津子は全然平気な時もあれば、『こいつ

## ほしかったサイズに

少しは手伝えよ、って思うときもあって、つまりお互い様なんです」

「身近にあったことをそのまま書いてあげた」と藤野さん。「団地の住人も、これまで会った人や出来事を、少し設定を変えて書いています。会わなくなった友だちや、何度も繰り返し読んで好きだったマンガや本。一度でも心の支えになったものは忘れない。私が何かを書く時には、そんな人やものが、形を変えてイメージをつくっているなと思います」

藤野さんの作品が持つ、問題含みの人生を静かに肯定するやさしさ・強さが、多くの人をひきつけています。「今、社会でいろんなことが動いていたり、物価が上がって生活が苦しんでいる、怒りを表に出せずに真面目に生きている人が多いのかな。そんな人たちが疲れた時に、のんびりした物語を求めているのかも。私自身つらかった時、自分がやさしくなれるような作品を書いてきたんです。誰かが家に棚をつくりたい時に、

「あ、うちもこの幅のサイズがほしかった」と思えるような、ほっとしていただける作品をこれからも書いていけたらと思います」

## 〈月1回〉 老いた母と向き合う

西田かおり(仮名)

80代の母と60代の娘は互いに一人暮らし、ある朝、母は布団から起き上がれなくなりました。

母担当のケアマネジャーのSさんに、布団から起き上がれなくなった母の状態を伝えると、受診をすすめられました。かかりつけ医は母の病状に適切な病院を紹介しました。Sさんに介護タクシーを手配してもらい、向かったのは隣の市の病院。母は糖尿病により発症した「化膿性脊椎炎」と診断され、緊急入院となりました。

それからの入院手続き、入院に必要な物品の準備や購入、医師からの病態説明や手術についての説明など、数日間目は目まぐるしく過ぎました。手術の有無の決断については、離れて住む姉夫婦に相談し、手術はおこなわないことにしました。一人で考えて「母のために後悔しないか」と迷い

### 一人で母の入院につきあうストレス

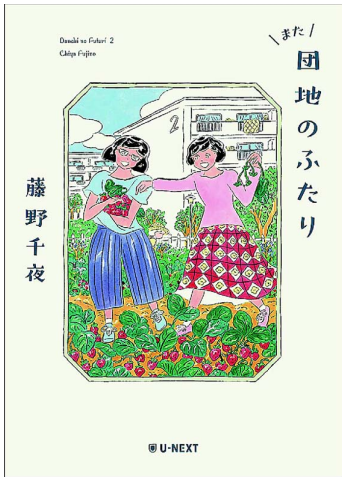
ましたが、話し合っただけで判断は正しかったと、今は思えます。

つらい日々でした。毎日車で30分かけて病院に通うのですが、運転の途中でときおり胸が苦しくなったり、頭の後ろが締め付けられるように痛むことがたびたびありました。車を止めて深呼吸してこたえを得ることが多々あり、自分では心筋梗塞か?と怖くなりました。これがまさしく「精神的ストレス」でした。つらいのは、このことをすぐに伝えて伝える同居家族がいなかったことです。

私は40代で卵巣腫瘍を患い、手術の後遺症で体調管理がむずかしくなり、55歳で仕事を退職。9つ年上の私の連れ合いもがんを患い、64歳で亡くなっていました。もし、彼が存命なら、とよく考えました。年の差9歳、気の強い私を優しく穏やかな性格で受け入れてくれ、近くに住む母にも信頼されていました。倒れた母への心配を共有してくれる同居の家族が身近にいたら、ストレスも多少は軽減しているかも、と思います。

母は緊急入院してから、抗生剤の点滴など適切な治療のおかげで激痛などの症状も寛解。約一カ月半で退院を促されました。

つづく (次回は2月1日号)



『また団地のふたり』 U-NEXT 1600円+税



『編集ども集まれ!』(双葉文庫) 双葉社 790円+税

